

第2回 農業農村整備における地球温暖化対応検討会 議事要旨

開催日：平成19年10月15日(月)

開催場所：飯野ビル8F 4～6会議室

(議事要旨)

メコン河等で検討している農業水利用モデルは、日本でも適用可能であり、地域の多様な農業水利用を考慮することができる。

ダム運用管理(夏期制限容量の見直し等)に関しては、国土交通省でも検討を行っているが、農林水産省としては、異常渇水に備え、制限水位を上げる管理を検討しているところ。

既存の淀川流域のモデルに農業用ダムやため池等を組み込むことは可能である。

初の不稔発生は、開花期の温度が34～35 を超えると葯の開きが悪くなり花粉の溢出が阻害される。稲の開花は1時間程度であるのでその時の気候に左右される。

高温障害といった負の現象ばかりに注目するのではなく、温暖化を利用した地域資源の活用も考慮すべきである。